

地域子育て支援センターの役割に関する一考察

—コロナ禍における子育てを通して—

鈴木 順子*

A study of roles of local childcare support centers : Through child-rearing under the COVID-19 pandemic

This study is to consider the centers' roles for parents and children visiting the facilities for child-rearing, when child-rearing support centers were closed in the N city area, and how they feel using the centers after their re-opening. The above is the purpose of this study. As a result, I have studied the roles of the local childcare support centers. The Centers are an important place that children can visit with their caregivers. They also offer people various advantageous services by directly tackling community problems.

I. 本研究の目的

昨今、新型コロナウイルス感染が心配される中で、親と子どもはどのように過ごしているのだろうか。今回、一つの事例として地域子育て支援センターを検討した。地域子育て支援センターは、子ども・子育て支援新制度の地域子ども・子育て支援事業の中の一事業である地域子育て支援拠点事業として実施されている。地域子育て支援拠点事業とは乳幼児及びその保護者が相互の交流を行う場を提供し、子育てについての相談、情報の提供、助言その他の援助を行う事業である。地域の実情に応じた子育て支援として実施されている。

コロナ禍における子育て支援の先行研究としては、コロナ禍での外出が難しい状況においては、I-PCITを用いての育児支援に注目した報告(川崎ら、2021)¹⁾や研究(古川、2021)²⁾もみられる。また地域子育て支援センターにおける職員の意識調査を通してコロナ禍でのセンターの役割や運営について考察している研究(小嶋ら、2021)³⁾もある。これらの報告や研究は個人との面談を対象としたものや地域子育て支援センターの職員を対

象としている。

本研究では、日頃から親子で利用している地域子育て支援センターに来所する母親を対象に質問紙調査を行った。N市の地域子育て支援センターは愛知県の緊急事態宣言に伴い、自粛のため、閉鎖していた期間があった。この期間における子育ての実情や心情、母親が自粛期間後に地域子育て支援センターを利用し、感じたことを通じて、来所する親子にとっての地域子育て支援センターの役割を考察することを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査方法と対象者

(1) N市の概要とセンターの開所時間

愛知県N市は2020年12月現在、人口は約9万人、世帯数は約3万世帯である。N市の特徴としては、総人口、世帯数共に増加傾向にある。0～11歳の年少人口や6歳未満の子どもがいる世帯に関しても年々、増加している。合計特殊出生率は全国、愛知県よりも高い数値を示している。駅近くには多くのマンションが建立し、その中に愛知県N市の地域子育て支援センター(以下、「センター」又は「Nセンター」という)が立地している。市民にも利用しやすい場所として活用されている。

* 愛知東邦大学

Nセンターは子育て支援拠点施設として、月曜日から土曜日の9時～16時30分に開所している。土曜日には普段、保育所や幼稚園に通園している子どもが親と来所する姿もみられる。Nセンターでは、自由に遊ぶことができる広場の開放、子育て相談等が開催されている。

(2) 調査方法と対象者

Nセンターに来所した母親83名に質問紙を配付し、回収した。対象者の選定においては、日常生活の中でセンター利用が多い母親を対象者とする事で、センターの役割がより明確に示されるであろうと考えた。センター職員からは来所者についての聞き取りを行った。またセンターからは来所者数に関するデータを頂いた(2019年6月～2021年7月の来所者数)。表3、表4、表5はあらかじめ示した質問項目における複数選択可の形式で該当するものを尋ね、その回答を集計したものを用いて多い順に羅列した。自由記述を分析した方法は同様なものをグループ化してまとめたものが表6、表7である。また表8のセンター職員からの聞き取りは協力者の許可を得て、文章化した。

2. 調査期間

2020年12月に4回調査を実施した。

- ①12月1日(火) ②12月9日(水)
- ③12月12日(土) ④12月19日(土)

3. 調査内容

紙面による質問項目の内容は、①回答者の基本的属性、②回答者とパートナーの育児・家事時間、③育児の相談相手、④センターの来所回数、⑤センターの自粛期間中に子どもが過ごした場所及び子どもの遊び相手、⑥自粛期間中の子どもに関する変化、⑦育児に関して困っていること、困ったこと、⑧自粛期間後のセンター利用を通して感じることである。①から⑤はあらかじめ示した質問項目の中から該当するものを尋ねた。⑥から⑧は

記述形式での回答を依頼した。またセンター職員からの聞き取りを行った。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、研究の目的について口頭、及び書面にて説明し、調査協力者の自由意思のもとでご協力頂いた。また調査から得られたデータは個人が特定されないよう無記名で統計処理を行うこと、学会への発表、論文執筆等の研究目的以外には使用しないこと、データの管理方法を伝えた上で研究協力への承認を得た。

Ⅲ. 調査結果

1. センターの来所者数

2019年6月から2021年7月のNセンターの来所者数及び子どもの年齢別来所者数については表1、2に示したとおりである。2019年度の3月は新型コロナウイルスの感染が懸念され始めた時期であるため、来所者数は少ない。2020年4、5月閉館後である2020年6月開所時の来所者の総数は少なく、2019年6月や2021年6月の総数と比較しても2020年6月の来所者数が低い数値であることがわかる(表1参照)。職員の話によると、開館後の2020年6月当初は人が集まる場所に親が用心して来所を控えていた様子がみられていたとのことであった。しかし、2020年7月には来所者数も増加し、全体的には来所者の総数が毎月2000人前後と大きな変動がみられない状況は多数の人がセンターという場を必要としていることが考察できる。

また子どもの年齢別来所者数でみると、0、1歳児の来所が多いことがわかる(表2参照)。

2. 回答者に関する事項

(1) 回答者の基本的属性

本研究の対象者の基本的属性は20歳代が17人、30歳代が58人、40歳代が8人であった。核家族世帯は79人、祖父母同居世帯は4人であった。子どもの年齢は0歳児が35人、1歳児が37人、2歳児が16人、3歳以上児が19人であった。子どもの数

表1 センターの来所者数 (人)

年度	父親	母親	その他	子ども	総数
2019年6月	48	992	50	1,232	2,322
7月	38	900	39	1,171	2,148
8月	60	847	79	1,135	2,121
9月	55	962	64	1,204	2,285
10月	50	887	78	1,136	2,151
11月	48	926	58	1,168	2,200
12月	37	743	47	929	1,756
1月	45	830	47	1,039	1,961
2月	59	767	49	987	1,862
3月	34	415	31	547	1,027
2020年6月	77	890	11	1,021	1,999
7月	96	1,001	29	1,212	2,338
8月	136	938	18	1,174	2,266
9月	127	1,136	27	1,312	2,602
10月	129	1,088	22	1,254	2,493
11月	86	877	15	1,016	1,994
12月	83	828	19	998	1,928
1月	123	873	13	1,065	2,074
2月	85	989	15	1,141	2,230
3月	86	1,071	22	1,286	2,465
2021年4月	97	916	21	1,108	2,142
5月	92	843	12	1,006	1,953
6月	84	1,042	28	1,247	2,401
7月	93	826	28	1,040	1,987

は1人が58人、2人が25人であった。専業主婦が最も多く44人、育休が29人、就労している母親は10人であった。

(2) 回答者とパートナーの育児・家事時間

母親の育児時間は平日、休日共に、4時間以上が9割、父親の育児時間は平日が1時間以内で約5割と最も多く、休日は3時間以上が約7割となっている。休日の家事に関しては母親の約8割

が3時間以上、父親は1～3時間が9割となっている。

(3) 育児の相談相手

日頃の母親の育児の相談相手は「パートナー」が最も多い。次いで「友人・知人」、「祖父母」、「Nセンター職員」の順に相談している結果がみられた(表3参照)。

表2 センターにおける子どもの年齢別来所者数

(人)

年度	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	その他	総数
2019年6月	330	558	211	81	17	31	4	1,232
7月	340	453	208	103	44	19	4	1,171
8月	299	430	234	93	44	29	6	1,135
9月	317	473	301	73	18	13	9	1,204
10月	326	390	304	79	12	14	11	1,136
11月	355	417	245	93	26	24	8	1,168
12月	296	316	209	61	26	13	8	929
1月	360	350	234	62	13	11	9	1,039
2月	314	346	211	75	12	15	14	987
3月	177	185	122	36	15	4	8	547
2020年6月	347	388	236	27	12	7	4	1,021
7月	398	474	245	60	21	7	7	1,212
8月	440	403	215	60	33	18	5	1,174
9月	492	508	218	76	12	4	2	1,312
10月	501	515	127	94	11	5	1	1,254
11月	390	435	120	54	12	4	1	1,016
12月	356	445	109	67	8	10	3	998
1月	341	474	156	63	15	10	6	1,065
2月	360	500	166	97	13	3	2	1,141
3月	402	574	169	91	18	23	9	1,286
2021年4月	367	439	181	87	13	19	2	1,108
5月	293	465	188	36	15	5	4	1,006
6月	333	625	234	41	9	4	1	1,247
7月	219	525	186	63	27	19	1	1,040

表3 母親の相談相手

(人：複数回答)

相談相手	人数
パートナー	72
友人・知人	63
祖父母	54
Nセンター職員	19
保健センター職員	7
近所の人	2

(4) センターの来所回数

母親に「センターには何度目の来所か」について質問したところ、「1回目」が3人、「2回目」が4人、「3回目」が1人、「4回目」が3人、「5回目以上」が72人となっている。日頃から利用している来所者であることがわかる。

3. センターの自粛期間中の育児に関する事項

(1) センターの自粛期間

Nセンターでの自粛期間は2020年4、5月で、この期間、Nセンターは閉館され、6月1日から開館された。再開後の感染予防として、センター入室時に来所者の消毒と検温、マスク着用を促している。また館内の換気や玩具の消毒も適宜実施し、親子1組の滞在時間を1時間とし、開館している。

(2) センターの自粛期間中に子どもが過ごした場所

Nセンターが自粛期間中に子どもが過ごした場所は、「自宅」が最も多い。次いで、「公園」、「祖父母宅」となっている（表4参照）。

(3) センターの自粛期間中の子どもの遊び相手

センターの自粛期間中の子どもの遊び相手について質問をした。母親が最も多く、次いで父親、祖父母となっている（表5参照）。

表4 自粛期間中に子どもが過ごした場所

(人：複数回答)

過ごした場所	人数
自宅	77
公園	34
祖父母宅	21
子どもの友だちの家	8
母親の友人・知人の家	8
Nセンター以外の公共施設	6
親類宅	5

表5 自粛期間中の子どもの遊び相手

(人：複数回答)

子どもの遊び相手	人数
母親	80
父親	47
祖父母	30
子どもの友だち	16
親戚の人	3

(4) 自粛期間中の子どもに関する変化

「自粛期間中の子どもに関する変化」について尋ねた。「お菓子を沢山、食べるようになり、太った」「だらだらと過ごすことしかできず、運動不足になった」「運動不足なのか、体力が余ってお昼寝ができない」「人との関わりが減少、人見知りが再発」「子どもが我儘になった」等の回答がみられた。

(5) 育児に関して困っていること、困ったこと

母親が育児に関して困っていること、困ったことは何かを尋ねた。回答については、表6に示す内容にまとめられた。

(6) 自粛期間後のセンター利用による利点

—子どもと親の利点から—

自粛期間後のセンターの利用を通して、どのように感じているかについて尋ねた（表7参照）。自粛期間後に子どもがセンターを利用したことに対して親がよかったと感じることは、他の子どもとの交流で成長できること、いろいろな人と触れ合う機会が増えることで様々な経験ができ、遊びの幅が広がること、広い場所でのびのびと動き回れること、家とは違う玩具で遊ぶことができること等が記されていた。

母親にとっての利点は、安心して遊ばせることができる場所であり、センターの保育士やママ友と相談できる場、人との交流の場、親同士話ができ、ストレス発散になる場、気分転換できる場等

表6 育児に関して困っていること、困ったこと（自由記述）

子どもの遊び環境に関する問題	<ul style="list-style-type: none"> ・外出先で思いきり、安心して遊ばせられない。 ・1歳になり自由に動き回るようになったが子どもを連れていく場所が限られた。 ・人が集まる場所に多く連れて行きたいが、感染リスクが高まること。
人と関われないことから発生する問題	<ul style="list-style-type: none"> ・センターに行けないため、ママ友に会って話せず、また周りのママ友からの口コミ等の育児情報が入手しにくかったこと。 ・実家（県外）に頼れなくなった。 ・知人に会えない。孤独感。 ・孤立感。 ・子どもが同世代の子どもと遊べないこと。 ・子どもに親以外の人と関わる機会を与えたかったができなかったこと。 ・子どもが母親以外の人との関わりをもつことができず、人見知りや酷くならないか心配。
毎日の子どもとの関わり方の問題	<ul style="list-style-type: none"> ・ずっと家にいる為、お菓子の量とテレビを見せる時間が増えた。 ・家で毎日遊ぶことが同じであきてしまった。 ・遊び方が分からなかった。
毎日の生活の中での親の問題	<ul style="list-style-type: none"> ・夫が仕事のため、家にこもりきりで、買い物も行きづらかった。 ・夫がリモートワークのため、昼食の準備の負担等の家事時間の増加。
親のストレスの問題	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと家で過ごす時間が多く、イライラすることが増えた。 ・元々、外出する事が好きだった為、家に閉じこもることは辛かった。 ・子育ての不安でイライラしていた。 ・外出、旅行に行けず、気分転換が難しい。

の場所として活用できると記されている。また感染を心配する母親の記述もみられた。

4. センター職員からの聞き取り

センターの自粛期間後に来所した親子の様子についてセンター職員からの聞き取りをし、表8にまとめた。

IV. 考察

1. センターの役割

N市は0～11歳の年少人口や6歳未満の子どものいる世帯が年々、増加傾向にあり、合計特殊出生率が高い数値を示している。本研究ではNセンターに来所している親子にとってのセンターの役割について考察した。

センターの来所者数に関しては閉館前後の来所者に減少はみられたが、毎月2000人前後と総数に大きな変動がみられない状況はコロナ禍においても多数の人がセンターという場を必要としていることが考察できた。

回答者の特徴としては、核家族世帯の専業主婦家庭が多く、30代の多くの母親がセンターに来所をしていた。センターを5回以上利用している親子が多い。子どもの年齢は0、1歳児が全体の約8割であり、1人の子どもを育てている母親が多いことから、初めて育児と関わるため育児に不慣れなこと、また子どもと二人きりで一日を過ごすことから育児ストレスを溜めやすいのではないかと考えられる。

センターの自粛期間中の育児については以下の事があげられていた。センターの自粛期間中に子どもと過ごした場所は「自宅」「祖父母宅」と安心できる場所を選択して過ごしており、遊び相手についても「母親」「父親」「祖父母」等、親族以外の人と関わる事が少ないことがわかった。また祖父母宅で過ごしている親子がいる反面、「実家（県外）に頼れなくなった」という回答もみられ、身近に子育てを援助する人が少なくなったことがうかがえた。また育児に関しての困り事では、子どもの運動不足に関する事、子どもが母親以

表7 自粛期間後のセンター利用を通して（自由記述）

子どもの利点	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と接することが成長になっている。 ・友だちや知らない大人と接する機会ができ、家とは違う楽しさを感じられている。 ・同じ位の子どもと触れ合うことができ嬉しい。 ・のびのびしている。動き回れるので良い。 ・いろいろな子どもと関われる。 ・友だちと過ごせるので、楽しそう。 ・年上の友だちに刺激をもらえる。 ・遊びの幅が広がる。 ・暖かい場所で体を動かせるのは良い。 ・いろいろな人と触れ合う機会が増えることで様々な経験ができ、遊びを学べている。 ・家とは違うおもちゃで遊ぶことができ、一緒に遊べる子どもがいて楽しそう。 ・自由に来られるし、沢山の刺激をもらえる。 ・遊び場ができ喜んでる。 ・親以外との関わりはとても刺激になるようで、いろいろな感情が発達し、他の子どもが遊んでいる様子を見て、やってみたいと感じたりしている様子。 ・広い場所で遊べるので楽しそうであった。 	
母親の利点	遊び場の環境	<ul style="list-style-type: none"> ・安心して子どもを遊ばせられる場所。 ・遊び場所が増えてよい。 ・自分たち以外の大人の目があるので安心できる。 ・人との交流の場 ・広々と遊べる場所 ・予約なしで利用できるのもとても助かっている。
	人との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・親同士で話ができ、ストレス発散になる。 ・大人と話ができるので助かる。 ・人と話せるので、ありがたい。
	気分的なこと	<ul style="list-style-type: none"> ・気分転換になる。 ・広い場所で人と話すことで気分が明るくなる。 ・子どもと2人での時間が長い分、センターを利用すると気分が楽である。 ・ママたちや職員さんと話せたり、リフレッシュできる。 ・居場所ができた。 ・家にいると、私にべったりだが、センターでは自由に遊んでくれてよい。 ・同じくらいの子をもつ母親と話せる同じ空間にいただけで気が楽になる。 ・子どもの成長が確認できる。 ・センターは親子にとって必要な場所だと改めて思った。
	相談できる場	<ul style="list-style-type: none"> ・相談できる先生や他の子の母親がいて有り難い。 ・子どもの様子について相談できる。 ・友人に会えるので相談できる。 ・相談場所
母親の心配事	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃをなめてしまうこともあり、これまで以上に気を遣う。 ・感染症が心配。 ・室内なので不安はあるが、消毒や利用時間を短縮するなどすれば来れると思う。 	

外の人との関わりをもつことができず、人見知り
が酷くならないかの心配、同世代の子どもと遊ば
せたいが、その機会がない等の子どもの育ちに関
する回答や、安心して遊ばせることができる場所
が少なく、悩んでいる様子がみられた。安心して

子どもが遊ぶことができ、人との関わりをもつこ
とができる場を望んでいることがわかる。

また家の中で子どもとどのように遊び、過ごす
かという母親の悩みもみられる。母親の育児時間
が長いこと、自宅で子どもと過ごす時間が多いこ

表8 センター職員からの聞き取りから

- ・開館後の2020年6月当初は人が集まる場所に親が用心して来所を控えていた様子がみられた。
- ・自粛期間後に来所した時には、自宅以外で遊んだり、親以外と接する機会がなかったため、人見知りが強くなったと訴える親が多かった。
- ・気軽にに行ける場所、おしゃべりをする機会がなく、ストレスを抱えている母親が多い。
- ・父親が在宅ワークで、子どもが騒ぐと仕事に差し支えるため、自宅で過ごすことができない。そのため、午前も午後も来所する親子がみられる。
- ・外出しなくても困っていないと感じている親子には、子育て情報が届いておらず、問題が見えづらくなっている。ある母親からセンター利用は必要ではないと思っていたがコロナ禍以前に来所した際、講座等があることをセンター職員から聞き、参加したかったという声もあり、地域の親に子育て情報が行き届いていないことを感じた。また発達が遅い子どもに対しては早々にセンターに来所していれば、子ども同士の関わりをもつことができたり、職員も早い段階で、直接子どもをみて、助言することもできたのではないかと思う。
- ・育児相談は現在、電話での対応と対面のみでの対応のため、チャット等も利用することが必要ではないかと考えている。
- ・講座等の行事もコロナ禍の中で、取りやめとなっており、その対応も必要だと考える。
- ・センターの滞在時間は1時間、15組と決まっているため、同時間に沢山の人が来所すると、入館を断るケースがあったり、人の入れ替えを行ったりするため、相談に対してしっかりと聞けない時もある。来所者に対しては、今まで以上に丁寧に対応するように心掛けている。

とから、母親のストレスの問題、孤立感等、コロナ禍においての母親の育児の大変さが考察できる。さらには、夫の在宅勤務での家事の負担増や子どもとの居場所に困り、頻繁にセンターに来所している親子の現状もみられ、様々な悩みを抱える母親の様子がうかがえる。

自粛期間後のセンターの利用に関して回答者が感じたことは、子どもが家とは違う玩具で遊ぶことができ、広い場所で楽しそうに遊んでいる様子や親自身も安心して子どもを遊ばせることができる場所であること、他の子どもや人との関わり、また交流を通して様々な経験ができること等、これらの人的、物的環境が子どもに対してよい影響を与えていると感じている様子がうかがえた。

日頃の母親の育児の相談相手として多い回答は「パートナー」「友人・知人」であった。「友人・知人」は子どもの友達の母親、いわゆるママ友のことであり、日頃から相談相手として関わっていることがわかる。また今回の調査の回答者は0、1歳児で一人の子どもをもつ親、つまり初めての育児を経験する人が多いことから実際に口コミで情報を得たいと考えているという記述もみられる。しかし、自粛期間中の子どもの遊び相手は「子ど

もの友だちと遊ぶ」の回答数は少なく、実際には対面をして話していない現状にあったことがわかる。母親が困っていることとして、「ママ友に会って話せず、また周りのママ友からの口コミ等の育児情報が入手しにくい」ことが記されていたことから対面で話すことができない状況が考察できる。

以上の事から本研究では、センターが利用できない期間の問題点として、子どもの遊び環境に関すること、人と関われないこと、毎日の子どもとの関わりや子どもの身体的なこと、毎日の生活の中での親の困り事、親のストレスや孤立等があげられていた。しかし、自粛期間後のセンター利用においての記述では、安心して子どもを遊ばせられる場所、人と関わることによる子どもの成長、母親自身が人と話し、人と交流する中でのストレス解消、また居場所、相談場所としてのセンター利用に関する利点がみられた。さらにはセンター職員からの聞き取りにより、対面で母親と話すことで子どもの様子を観察し、その場で助言できるため、発達の遅れ等を早期に発見することにも繋がる利点等も挙げられたことから人と対面で接することは親子にとってはメリットがあるのではな

いかと考えられる。来所を通して人と直接、関わることに意義があると捉えることができた。

自粛期間中の親子の問題やセンターを利用することでの親子の利点を通して、来所する親子にとってのセンターの役割の必要性を考察することができた。

2. センターの課題と今後の方向性

センターの課題としては、以下の事があげられる。コロナ禍のため、育児に関する講座や行事については行われていない状況がある。また滞在時間の制限があるため、相談に関しては十分にセンター職員も対応できないとの職員からの聞き取りがあった。子どもとの関わりが分からない親や、情報を入手しにくいこと、子育ての不安等の親の悩みもみられた。こうした状況に対応するための代替、補充処置を講ずる必要がある。そのためには、自宅で親子が様々な遊び方を入手することで楽しく過ごせ、また親子が孤立せずに過ごしていけるように、親からの育児相談や親が学べる育児講座、子どもとの遊び講座等のセンター行事を何らかの形で提供できることが望ましいと考えられる。滞在時間制限の補充処置として、また仮に緊急事態宣言が発令され、センターが自粛し、閉館した場合、人との繋がりが持てない状況を見ると、どのように地域の親や子どもたちに不足な支援を提供していくのか。例えば、母親同士の育児の情報交換が対面でできないことに関しては、育児の情報はネットで頼ることになるが、ネット情報が氾濫している中で、情報に振り回され、より一層、不安が増す親もいるとも考えられるため、実際に話ができる育児相談の対応も必要である。

今後の方向性として、そうした状況下においてセンター職員の相談等の補助的役割としてのオンライン等のICT活用が必要になるのではないかと考えられる。画面を通しての相談を受けたり、手遊びや絵本の読み聞かせ、体操等、画面の保育者との遊びの提供を通して、子どもと親と一緒に遊ぶことができたり、画面を共有して親同士の交流

を設けたり、育児講座を通して学んだりする機会を得ることは親にとっての育児不安解消の一助となるのではないかと考えられるため、一つの案ではあるが、今後のセンターの方向性として、検討していく必要がある。パンデミックは今後も起こりうる可能性もあり、子育ての課題としてその対応を考えておく必要がある。また母親は、子どもの成長や母親自身の子育て不安の解消等の為にも、人と関わることの大切さを重視していることから、センターはコロナ禍における感染予防について十分に配慮をしながら、来所者同士、職員との関わり等、来所者が安心してセンターで過ごし、人とのつながりをもてるように環境を整備していくことが望まれる。

今後、コロナ禍での地域の拠点としてのセンターの役割は益々重要になると考えられる。

参考文献

- 1) 川崎雅子、坂寄里紗、加茂登志子「コロナ禍における子育て支援—インターネット親子相互交流療法—」『子どものこころと脳の発達』Vol.12 No.1, 2021, pp.71-78.
- 2) 古川心「コロナ禍における子育て支援—Internet Parent-Child Interaction Therapy (I-PCIT: インターネット親子相互交流療法) 導入の試み—」『神戸親和女子大学研究論叢』第54号, 2021, pp41-49.
- 3) 小嶋玲子、古田美津子、田中弘美「新しい生活様式の中での子育て支援—コロナ時代における地域子育て支援センターの役割—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第23号, 2021, pp.61-72.